

台灣日語學習者於請託狀況角色扮演之縱斷研究 ——分析「會話開始部分」與「會話結束部分」——

陳 文敏

靜宜大學日本語文學系 助理教授

摘 要

本研究以台灣日語學習者為對象，每半年實施縱斷研究調查，收集了他們跟教師的請託狀況之角色扮演資料，並加以分析。本稿使用了兩次日語角色扮演資料，針對學習者的「進入研究室」與「離開研究室」時的打招呼，「請託開始部分」，「請託結束部分」等三點進行了分析與考察。其結果整理如下列三點。

(1)在「進入研究室」與「離開研究室」時的打招呼方面，大部分的學習者都表現的不錯，但有些學習者不積極地打招呼。(2)「請託開始部分」方面，所有學習者都有從事狀況說明，但大多的學習者尚未能以正確的說法來表達。而有預告請託的學習者中，亦有人使用了日語母語話者不會使用的表現；但第二次資料裡大致上就正確地使用。(3)「請託結束部分」方面，兩次資料都發現以道謝作為結束的學習者居多，而且都以「ありがとうございました」之過去式使用者為多。但，幾乎沒有人使用「よろしく願います」。另外，從學習者的「離開研究室」時的打招呼表現及「請託結束部分」的表現，觀察到大多數的學習者尚未能依事態的進行狀況來區別使用打招呼及道謝時的表現應為過去式或非過去式之現象。

關鍵詞：縱斷研究，台灣日本語學習者，請託狀況之角色扮演，
會話開始部分，會話結束部分

台湾人日本語学習者の
依頼場面のロールプレイの縦断研究
—「会話開始部」と「会話終結部」をめぐって—

陳 文敏

靜宜大學日本語文學系 助理教授

要 旨

本研究では台湾人日本語学習者を対象に、半年に一回縦断的に教師に対する依頼場面のロールプレイデータを収集し、分析している。本稿では二回分の日本語ロールプレイデータを用い、学習者の「入室」と「退室」における挨拶、「依頼開始部」、「依頼終結部」の3点に焦点を当てて分析と考察を行った。その結果は以下の3点にまとめられる。

(1)「入室」と「退室」における挨拶では、うまく行っている学習者が多いが、自ら積極的に挨拶しない学習者もいる。(2)「依頼開始部」では、全員状況説明をしているが、正しい言い方で言えていない学習者が少なくない。また、依頼予告も行った学習者の中では日本語母語話者が使わない表現を用いた者もいるが、二回目のデータではほぼ正しく発話されている。(3)「依頼終結部」では、二回のデータともお礼で依頼を終わった者が多いが、過去形の「ありがとうございました」の使用者も少なくない。一方、「よろしくお願いします」の使用者はほとんどいない。なお、学習者に見られた「退室」における挨拶表現、及び「依頼終結部」の表現から、事態の進行状況によって挨拶やお礼の表現における過去形と非過去形の使い分けがまだできていない学習者が多いことが確認された。

キーワード：縦断研究、台湾人日本語学習者、依頼場面のロールプレイ、会話開始部、会話終結部

The longitudinal study about request situations role play of Taiwanese Japanese learners: Focus on the opening section and closing section of conversation

CHEN, Wen-Miin

Assistant Professor of the Department of Japanese Language and
Literature, Providence University

Abstract

This study focuses on Taiwanese Japanese learners. Longitudinal study survey is performed every six months; request situations role play data between the Taiwanese Japanese learners and the teacher are collected and further analyzed. This paper uses 2 data sets of Japanese role play, focusing mainly on three points. The three points and the results of those are as following. (1) In the greeting wordings of entering and leaving a room, many learners are doing well, but some learners do not greet positively. (2) In request starting section, all learners carried out conditional explanation, but most learners were not able to use correct expressions. On the other hand, for the learners with pre-announced request situations, some learners used expressions which native Japanese speakers do not use. (3) In request closing section, many learners finished with gratitude, although many learners used the past form “ARIGATO-GOZAIMASHITA”. However, barely anyone used “YOROSHIKU-ONEGAISHIMASU”. Furthermore, it appears that most learners cannot clearly distinguish the usage between the past forms from the non-past forms of expressions according to the situation.

Keywords: the longitudinal study, Taiwanese Japanese learners, request situations role play, opening section of conversation, closing section of conversation

台湾人日本語学習者の
依頼場面のロールプレイの縦断研究
—「会話開始部」と「会話終結部」をめぐって—

陳 文敏

靜宜大學日本語文學系 助理教授

1. はじめに

台湾の大学で日本語を勉強している台湾人日本語学習者は、普段日本語を話す機会はさほど多くない。そのため、彼らの発話能力をさらに向上させる方法を、教育現場にいる我々教師は日々模索している。一方、台湾においては台湾人日本語学習者の発話能力に関する調査研究がさほど多くなく、彼らの発話能力の実態としてはまだ明らかになっていない面が少なくない。そこで、本研究は台湾人日本語学習者の発話能力の実態、そしてその変化過程を明らかにすべく、縦断研究調査を行っている。具体的には、対象となっている台湾人日本語学習者に入学して半年後から、約3ヶ月に一回日本人教師のインタビューを受けてもらい、データの収集をしている。それと平行して、2年生後期、つまり日本語の勉強を始めて約1年半経ってから半年に一回日本人教師を相手とする依頼場面のロールプレイ調査も行っている。本稿では、このロールプレイについての分析結果を報告したい。

調査に日本人教師への依頼場面のロールプレイを採用した理由は、以下のように考えている。台湾という非日本語環境において、学習者が実際に遭遇する日本語使用場面として日本人教師との会話があり、さらにその中で重要なものが「依頼」だと考えたためである。

「依頼」は、会話を失敗すれば学習者の目的が達成できず、想定する利益が得られない恐れがある。この点で「依頼」は、雑談とは異なる重要性がある。

2. 先行研究

今まで日本語学習者を対象に、ロールプレイを行った研究は少なからずあり、断り、勧誘、不満表明、謝罪、依頼といった場面が取り上げられている¹。本稿の関心事である依頼場面に関しては、水野（1996）、猪崎（2000a、2000b）、謝（2001）、池田・三好・村木（2002）、張（2004）、徐（2006、2007、2011）、アクドーン・大浜（2008）などの研究がある。それぞれ状況設定が異なっていて単純に比較することは難しいが、「日本語学習者と日本母語話者の依頼展開パターンや使用表現に違いが見られている」ことが共通した結果として挙げられる。ここでは、本研究の二回目のロールプレイの状況設定（3節の表2参照）と類似した池田・三好・村木（2002）を簡単に紹介する。

池田・三好・村木（2002）は教師への推薦状依頼を、教師の研究室の入室から退室までのロールプレイデータとアンケート調査を用いて分析している。研究対象は、次の4グループである。

JJ：日本母語話者

CJ：日本にいる中国語母語話者の学習者

EA：オーストラリアにいる英語母語話者の学習者

CA：オーストラリアにいる中国語系学習者

本稿の焦点と関わりのある結果として、次の3点が挙げられる。

①入室と退室の挨拶では、4グループとも何らかの挨拶をしていることから差はほとんどない。

②「お願いしたいことがあるんです」といった発話の使用は、CJ > JJ > EA > CA の順に少なくなっている。

¹ 談話完成テストなどの調査方法を用いている研究もあるが、これ以上触れないことにする。

③終了の際の「よろしくお願いします」の使用は、JJ>CJ>EA=CAのように、オーストラリア在住の学習者には少なかった。

なお、②と③に関しては生活環境における言語使用の影響が否めないと指摘されている。

3. 本稿のデータと依頼場面のロールプレイ内容

本研究は、台湾人日本語学習者を対象に、縦断的に彼らの日本語発話能力について調査を行っている。調査対象は、筆者が勤めている大学で日本語を主専攻にしている台湾人日本語学習者(男性5名、女性20名、ほとんどが日本語学習歴なし、以下学習者)である²。前述のように、ロールプレイ調査は、彼らが日本語を勉強して約1年半後から、半年に一回実施している。依頼場面のロールプレイは2種類あり、いずれも依頼対象を日本人教師と設定し、それぞれの内容は歓迎会での挨拶の依頼、及び推薦状の依頼である。2011年11月末現在、二回分のロールプレイ調査を実施し、表1と表2のように計47組³、約174分のデータを収集した。

² 2012年6月現在では筆者は、この25名の学習者に選択科目のコンピュータ関係の授業しか教えたことがない。つまり、彼らの日本語学習には直接携わっていない。

³ 本研究に参加している学習者は少しずつ離脱しているため、一回目のロールプレイでは25名、二回目のロールプレイでは22名の参加となった。なお、表1と表2に示すロールカードにある日付は調査日によって修正している。

表1 一回目のロールプレイ（歓迎会での挨拶の依頼）について

2011. 05. 10～05. 19実施、計25組、約98分収集した（1分27秒～8分16秒）。

角色扮演カードA 役割：学生

あなたは日本交換留学生歓迎会の準備委員之一。

該歓迎會將於下列時間與地點舉辦：

時間：兩個禮拜後的5月26日（星期四）15點半

地點：學校內餐廳

你來到XX老師研究室，拜託老師於該歡迎會上致詞。

聽看看老師的回覆後，希望老師最遲能在5月24日（星期二）前

給予確切的回覆。

（日本語訳＜筆者による＞：

ロールカードA 役割：学生

あなたは日本人交換留学生歓迎会の準備委員の一人です。

歓迎会は次の日時に次の場所で行われます。

時間：二週間後の5月26日（木曜日）15時半

場所：大学食堂

XX先生に歓迎会で挨拶をしてもらいたいため、先生の研究室に來ています。

先生の返答を聞いて、5月24日（火曜日）までに

確実なお返事をしてもらえるようにしてください。）

ロールカードB 役割：教師

学生が研究室へ頼みごとに来ます。

火曜日と木曜日には急に会議が入ることがあります。

予定が入らなければ、学生の頼みを引き受けても

いいと思っています。

表2 二回目のロールプレイ（推薦状の依頼）について

2011. 11. 17～12. 01実施、計22組、約76分収集した（2分21秒～6分28秒）。

角色扮演カードA 役割：学生

你從明年4月開始要到日本SAKURA大學交換留學，

希望你的授課老師XX老師幫你寫推薦信。

推薦信需要兩封，另一封請導師寫了。

推薦信的截止日為12/8（四），你希望老師能在12/6（二）中午前給你。

（日本語訳＜筆者による＞：

ロールカードA 役割：学生

あなたは来年の4月から日本のSAKURA大学へ留学に行きます。

授業担当のXX先生に推薦状を書いてほしいです。

推薦状は二通必要ですが、もう一つは担任に書いてもらっています。

締切は12/8（木）ですが、12/6（火）のお昼頃までに

先生からもらいたいです。）

ロールカードB 役割：教師

受講生が推薦状を書いてもらえないかとお願いに來ます。

いつも推薦状の依頼に來ている学生に次のことを要求しています。

- ・担任の先生にも書いてもらうように

- ・締め切りの情報

- ・簡単な自己紹介、成績証明書、留学計画書を二日以内

（土曜まで）にメールで送付すること

- ・依頼人本人が昼休みに研究室に受け取りに來ること

また、最近は忙しいので、推薦状の完成は

12/5（月）のお昼になることを伝えてください。

本稿では、この二回分のデータを使用して分析する。なお、実際、学習者がこのような状況に出会うとしたら、前もって話したいことを準備しておいてから教師のところを訪ねるだろうと思い、調査日の二日ほど前に、学習者にロールカードの内容をメールで知らせておいた⁴。そして、できるだけお互い相談しないようにも依頼しておいた。

4. データ処理と分析の枠組み

本研究は CHILDES (大嶋・Brian 1995、宮田 2004) という言語データベース処理システム⁵に従ってデータの文字化を行い、Microsoft 社の Excel というソフトで分析コーディングをしている。分析に当たって、ザトラウスキー (1993) の「話段」、及び Olshtain & Cohen (1983) と Beebe 他 (1990) の「意味公式 (semantic formula)」、そして 2 節で触れた先行研究を参考にしている。

ここで、「話段」と「意味公式」について簡単に説明しておきたい。「話段」とは「一般に、談話の内部の発話の集合体（もしくは一発話）が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の「談話」の目的によって相対的に他と区分される部分である」（ザトラウスキー 1993：72）。「意味公式」は言葉を「その意味内容によって分類したもの」（生駒・志村 1993：44）で、その分類されたものの最小の機能的な意味単位のことである。例えば、本研究で焦点を当てている「依頼開始部」には「依頼予告」「状況説明」等の意味公式が観察された。

⁴ しかし、収集したデータを見てみると、準備してきていない学習者もいるように感じられる。

⁵ CHILDES は Child Language Data Exchange System の略である。詳しくは <http://www.cyber.sist.chukyo-u.ac.jp/JCHAT/index-j.html> または <http://chilDES.psy.cmu.edu/> を参照されたい。

5. 分析の焦点

本稿は、学習者の「会話開始部」及び「会話終結部」の2つの話段について見ていきたい。それぞれの分析の焦点は、「入室」における挨拶と「依頼開始部」、及び「依頼終結部」と「退室」における挨拶⁶となるが、以下では、「入室」と「退室」における挨拶、「依頼開始部」、「依頼終結部」の3節に分け、意味公式の特徴、及び使用表現の傾向や誤用について報告していく。なお、「依頼開始部」は、入室の挨拶が終わって具体的な依頼表現、例えば「～をしていただけますか」といった表現が始まるまでのところ、「依頼終結部」は、依頼の用件についてのやり取りが終了して退室の挨拶までのところを指すことを断っておきたい。

この2つの話段を取り上げて分析する理由は以下の通りである。本研究は縦断調査であるが、2種類のロールプレイを実施してデータを収集しているため、その2つのデータの比較がしがたい。しかし、「入室」と「退室」における挨拶、「依頼開始部」、「依頼終結部」に関する縦断分析比較は可能であり、そして学習者の変化過程を探るのに適しているからである。

6. 結果

本稿のデータを調べてみたところ、以下のような意味公式と実例が観察された。

「入室」と「退室」における挨拶

入室の挨拶：「(先生) こんにちは」「失礼(いた)します」「お邪魔します」「先生、すみません」「先生」

退室の挨拶：「失礼(いた)します」「お邪魔(いた)します」「(先生) さようなら」「バイバイ」「じゃ、また」

⁶ 表2のロールカードには明記されていないが、実際は表1に示してあるロールプレイと同様に日本人教師の研究室へ行き、ロールプレイを行ってもらっている。

依頼開始部

依頼予告：「1つお願いいたします」「ちょっとお願いがあります（が）」「少しお願いがあります」「（ちょっと）お願いがあるけど」「（ちょっと）お願い（が）あるんです（が）」

状況説明：

一回目：「私は日本留学生歓迎会の係員／係り／学生／準備員です」「2週間後歓迎会あります」など

二回目：「来年の4月から日本のさくら大学へ留学します」「来年4月さくら大学へ留学することにしました」など

依頼終結部

お礼：「（先生）ありがとう」「（先生/どうも/まことに/本当に/お忙しいところ）ありがとうございました/ありがとうございます」

再依頼：「（先生）お願い（いた）します」「お願いしたいんです」

関係作り：「よろしくお願いします」（注：途中で言いかけている）

これらの意味公式と実例が学習者の二回分のデータにどのように現れているか、6.1節～6.3節で詳しく見ていきたい。そして、その結果は表にもまとめているが、ここで表における記号について説明しておく。

- ・ 学習者は3つの記号で表す。最初は性別で、Fは女性、Mは男性である。次の数字は通し番号であるが、9で始まるのは高校時代、少々日本語学習経験がある者である。
- ・ 使用された意味公式に○をつけて表す。
- ・ 複数の意味公式や実例が現れた場合、「○1、○2」のように数字をつけて行われた順番を示す。
- ・ 教師に誘発されて現れたと思われるものは●と表記する。

- ・お礼の「(先生/どうも/まことに/本当に/お忙しいところ) ありがとうございます」などは、それぞれ「○先、○ど、○ま、○本、○お」と記す。
- ・当該意味公式が観察されていない場合は「なし」と記入する
- ・入退室時が録音されていない場合は、「録音情報なし」で示す。

6.1 「入室」と「退室」における挨拶

「入室」と「退室」における挨拶の結果は表 3 の通りである。

表 3 から、入室の挨拶では F02、M02、M04 の 3 名以外、全員二回のロールプレイとも何らかの挨拶をしていることが分かる。しかし、教師の「こんにちは」に誘発されて初めて「こんにちは」と述べた学習者は 7 名いた。さらに、教師から「こんにちは」と挨拶されても、それに対する返答の挨拶をしていない学習者 (M02) もいる。さらに、中国語のように「先生」と挨拶した学習者も 1 名いた (M01)。

入室の挨拶表現として「失礼 (いた) します」が望ましいと思われるが⁷、二回のデータを通して、それがまだできていないのは F13、F17、F91、F93、M02、M04 の 6 名である⁸。

⁷ 学習者の表現の適切さ及び自然さの判断は、日本人教師 1 名とともに行った。以下も同様である。

⁸ M01 には二回目の録音情報はない。

表3 学習者の二回分データにおける「入室」と「退室」挨拶の結果

		入室挨拶					退室挨拶					
		(先生) こんにちは	失礼 (いた) します	お邪魔 します	先生、 すみません	先生	失礼 (いた) します	失礼 しました	お邪魔 (いた) します	(先生) さようなら	バイ バイ	じゃ、 また
F01	一回目	○									○	
	二回目		○								●	
F02	一回目	なし					○					
	二回目		○				○					
F03	一回目		○				なし					
	二回目	録音情報なし					録音情報なし					
F04	一回目	●					なし					
	二回目		○					○				
F05	一回目			○			○2		○1			
	二回目		○				○					
F06	一回目			○					○			
F07	一回目	○					なし					
	二回目	○					○					
F08	一回目			○						○2		○1
	二回目		○				○					
F09	一回目		○								○	
F10	一回目		○							○		
	二回目		○				○					
F11	一回目	●					なし					
F12	一回目		○				なし					
	二回目		○				○					
F13	一回目	●					なし					
	二回目	○					なし					
F14	一回目		○				○					
	二回目		○					●				
F15	一回目		○				○					
	二回目		○					○				
F16	一回目	○					○					
	二回目		○					○				
F17	一回目	○								○		
	二回目	●					なし					
F18	一回目		○				○					
	二回目		○					○				
F91	一回目	録音情報なし					なし					
	二回目	●								●		
F93	一回目				○		○					
	二回目	●					録音情報なし					
M01	一回目					○	なし					
	二回目	録音情報なし					録音情報なし					
M02	一回目	なし (教師が「こんにちは」と言っているが)								●		
	二回目	●					録音情報なし					
M04	一回目	○					なし					
	二回目	なし					なし					
M91	一回目		○				なし					
	二回目		○				なし					
M92	一回目		○				なし (教師が「じゃあ、さようなら」と言っているが)					
	二回目		○				録音情報なし					

一方、退室挨拶は入室挨拶ほどうまくできていない学習者が多い。まず、退室時に「お邪魔（いた）します」という入室の挨拶表現を使っている学習者が2名（F05、F06）いる。くだけた表現の「バイバイ」は2名（F01、F09）、「じゃ、また」は1名（F08）が用いている。さらに、何も言わない学習者は約半分の12名に上っている。特に男性学習者は、M02が一回目で教師の誘発で「さようなら」と発話している以外、全員全く挨拶せずに退室している。ところが、この退室時に何も言っていない12名の学習者の依頼の終結表現（6.3節の表6参照）を見てみると、12名とも「お礼」の発話をしている。中国語場面の場合、「謝謝老師（ありがとうございます、先生）」などとお礼をして退室することも可能である。恐らくこの12名の学習者は中国語場面のように「お礼」をしたため、そのまま退室してもよいと思っているのかもしれない。これに関しては、中国語母語のデータとの比較分析結果を、稿を改めて報告したい。

以上の結果から、「入室」と「退室」の挨拶については、うまく行っている学習者が多いが、自ら挨拶することに積極的ではない学習者もいることが確認できた。

6.2 「依頼開始部」

「依頼開始部」では上記のように、入室の挨拶が終わって具体的な依頼表現、例えば「～をしていただけませんか」といった表現が始まるまでのところを分析した。そこでは、依頼予告と状況説明の2つの意味公式が抽出された⁹。依頼の際、日本語母語話者の依頼予告の頻度に関しては、まだ定説がないようである。水野（1996）では相手との関係によって3割～7割となっており、謝（2000）のロールプレイデータでも10%～15%で平均12%のみ、アクドーン・大浜（2008）でも約13%しか見られないと報告されている。しかし、

⁹ 実際、先生からの行動指示の「座ってください」などについてのやり取りもあったが、本稿ではまず「依頼」に関わるやり取りのみを取り上げて分析した。

猪崎（2000：81）では 100%という結果である¹⁰。これに関してはさらなる検討が必要であろう。本稿の学習者の結果は表 4 に示す。

表 4 から、二回とも学習者全員、状況説明をしていることが分かる。しかし、依頼予告もしている学習者は一回目では 6 名 (F01、F02、F05、F07、F18、F91)、二回目ではその 6 名に加えて F12、F16、M92 の 3 名と計 9 名いた。「依頼予告」と「状況説明」の行われた順番であるが、一回目では、F07 と F91 の 2 名は依頼予告→状況説明、F01、F02、F05、F18 の 4 名はその逆の状況説明→依頼予告であった。これに対して、二回目では、9 名とも依頼予告→状況説明のように依頼を始めた。これがこのまま定着するのか、または何らかの変化を見せるか、今後引き続き調査と分析を行っていきたい。

ここでは、学習者が使用した表現に着目したい。まず、「依頼予告」についてであるが、最も用いられた表現は「(ちょっと) お願い (が) あるん/のです (が)」で、計 8 名が使用していた。ただし、そのうちの 1 名 (F02) は「ちょっとお願いがあるのですが」と、日本語母語話者は口語では使わなさそうな表現を使用している。さらに、くだけた表現の「(ちょっと) お願いがあるけど」(F02、F05)、この状況では不適切な「ちょっとお願いしますが」(F01)、「少しお願いがあります」(F18) という例も見られた。

F01、F05、F18 は二回目では正しく使うようになっているが、F02 は「～お願いがあるけど」から「～お願いがあるのですが」のように変化はしているものの、不適切なままである。

¹⁰ 本稿で言う「依頼予告」は、水野（1996）では「話題予告・話の方向づけ」、猪崎（2000）では「予告」、謝（2000）では「前置き」、アクドーアン・大浜（2008）では「依頼を導入する表現」という用語が使用されている。

表4 学習者の二回分データにおける「依頼開始部」の結果

		依頼予告					状況説明
		ちょっと お願いしますが	ちょっとお願 いがありますが	少しお願 いがあります	(ちょっと) お 願いがあるけど	(ちょっと) お願 い (が) あるん/の です (が)	
F01	一回目	○2					○1
	二回目					○1	○2
F02	一回目				○2		○1
	二回目					○1	○2
F03	一回目						○
	二回目						○
F04	一回目						○
	二回目						○
F05	一回目				○2		○1
	二回目					○1	○2
F06	一回目						○
	二回目					○1	○2
F07	一回目					○1	○2
	二回目					○1	○2
F08	一回目						○
	二回目						○
F09	一回目						○
	二回目						○
F10	一回目						○
	二回目						○
F11	一回目						○
	二回目						○
F12	一回目						○
	二回目					○1	○2
F13	一回目						○
	二回目						○
F14	一回目						○
	二回目						○
F15	一回目						○
	二回目						○
F16	一回目						○
	二回目		○1				○2
F17	一回目						○
	二回目						○
F18	一回目			○2			○1
	二回目					○1	○2
F91	一回目					○1	○2
	二回目					○1	○2
F93	一回目						○
	二回目						○
M01	一回目						○
	二回目						○
M02	一回目						○
	二回目						○
M04	一回目						○
	二回目						○
M91	一回目						○
	二回目						○
M92	一回目						○
	二回目					○1	○2

一方、「状況説明」で使用された表現についてであるが、全員ロールカードにある中国語の記述を日本語に訳して話しているように

見受けられた。しかし、いくつかの表現をまだ適切で自然な文法、または正しい発音で言えていない学習者がいる。ここでは、2 種類のロールプレイで見られた「状況説明」の表現の使用傾向を以下のようにまとめる。

一回目の歓迎会での挨拶の依頼では、「～していただけますか」といった表現までは、「～歓迎会の係員／準備委員です」または＜歓迎会開催時間＞などの話をしている。これは学習者に配った中国語のロールカードにある「你是日本交換留學生歡迎會的籌備委員之一。

（筆者訳：あなたは日本人交換留学生歓迎会の準備委員の一人です。）」にあたるところで、「籌備委員」という表現の日本語、そして

「歡迎會」の発音で問題が見られた学習者が少なくない。まず、「籌備委員」というところは、「係員（9名）、係り（3名）、学生（3名）、準備委員（2名）、準備員（1名）、幹事（1名）、責任者（1名）、人

（1名）」のように、8種類の表現が使用された¹¹。この8種類の表現のうち、恐らく「係り」と「準備委員」以外は日本語母語話者は用いないのではないかと思われる。一方、「歓迎会」を「かんけいかい」と発音した学習者が多く、半分の13名いた。さらに、「かいがいかい」「かいけんかい」「かんいんかい」「かんらんかい」のように発話している学習者もいた。＜歓迎会開催時間＞の説明においては、学習者が使用した表現の構文から名詞形と動詞形の2つに分けられる¹²。名詞形は、例えば「時間は5月26日3時半です」のような表現が見られ、使用者が最も多く、18名いた¹³。ほかの学習者は動詞形の使用となっているが、「（日時に）歓迎会があります」3名、「（日時）に行きます」2名、「（日時）に始まります」1名、「歓

¹¹ 「籌備委員」という表現を日本語に置き換えた22名の学習者のほかに、「～歓迎会の準備をしています」などのように言った学習者が3名、そして1名のデータは録音状態の関係で聞き取ることができなかった。

¹² 25名中11名は「依頼開始部」ではなく、具体的な挨拶依頼の後に時間の説明をしたが、学習者の傾向を調べるため、ここでは一緒に見ることとした。

¹³ 18名中5名が教師に質問されての返答であった。

迎会はします」1名¹⁴、「(日時)におこなわれます(筆者注:「行われます」の言い間違い)」1名と、5種類の動詞が観察された。この5種類の動詞のうち、「行います」と「します」は話者自身の意思を表すもので、この状況での使用は日本語母語話者なら避けるだろうと思われる。

二回目の推薦状の依頼では、「～していただけますか」といった表現までは、＜桜大学へ交換留学に行く＞旨の話をしている。二回目の22名の学習者のデータを見ると、表5のように、使用表現の基本文型は「①桜大学へ／に留学します」、「②桜大学へ留学に行きます」、「③日本の桜大学へ留学するつもりです」、「④桜大学へ留学することにしました」の4種類に分けられる。

表5 推薦状の依頼における学習者の状況説明の表現

①	F13: 桜大学へ交換留学を、え、交換留学しますが。 F91: 桜大学、あ、日本の桜大学に留学しますが。 F93: 日本の桜大学へ留学い、留学してい、えっ、留学いた、留学いたします。 M02: 日本の、桜大学、へ、交換留学す、します。 M91: 日本桜大学に留学します。 F07: 日本の桜大学へ留学するので、 F12: 日本の桜大学へ交換留学、に、行くので、 M92: 日本の桜大学へ留学するので、 F02: 日本の桜大学に留学しますから、 F10: 日本の桜大学へー いこ、こう、留学しますからー、 *F01: 日本の桜大学へ、 留学生を、交換する ので、 *F15: 桜大学 で 、交換、留学 をします 。
②	*F05: 桜大学へ 勉強 に行きます。 *F03: 日本の桜大学、 へ、行きます 。 *F14: 日本へ留学 へ 、行きまし、行きますから、 *F04: 桜大学 交換留学生 に 行きます。 *F17: 桜大学へ、留学 した 、行きます。 *M01: 日本の桜、 大学、留学ーし、留学ー、して 行きます。 *M04: 桜大学 でー 留学に行きますので、
③	*F08: 日本の桜大学へ、 留学行く つもりです。 *F16: 日本の桜大学へ 留学つもり なんですが。
④	F18: さっ、くら大学へ留学することにしました。

注: ゴシック体が誤用の部分である。

¹⁴ M04は「歓迎会はします。時間は～です。」と話している。

しかし、表 5 から分かるように、助詞や動詞の脱落や誤用などが見られた者も少なくない¹⁵。表 5 で、22 名中「*」のついた 11 名の発話は日本語の修正が必要である。今後、こうした誤用が如何に変化していくか、日本語母語話者のデータとどう異なるか、さらなる分析を行っていきたい。

6.3 「依頼終結部」

「依頼終結部」では上述したように、依頼の用件についてのやり取りが終了して退室の挨拶までのところを分析した。そこで、お礼、再依頼、関係作りの 3 つの意味公式が抽出された。その結果は表 6 にまとめてある。

表 6 を見ると、全体的にはお礼で依頼を終わった者が多く、二回分のデータでは差がほとんど見られないことが分かる。ただし、「(先生) ありがとう」というくだけた表現を使った学習者が 3 名 (F03、F09、M04) おり、F03 は二回とも「(先生) ありがとう」であった。さらに、「ありがとうございました」のように過去形を用いた学習者は半分以上の 15 名いる。会話終了時点では依頼内容はまだ実現していないため、過去形の「ありがとうございました」は適切とは言えないだろう。6.1 節の退室の挨拶で「失礼しました」の使用者が僅か 5 名であること、「お邪魔 (いた) します」の使用者が 2 名いることと併せて考えると、事態の進行状況によって挨拶やお礼の表現において過去形と非過去形を使い分けるということが、まだできていない学習者が多いことが確認できる。

¹⁵ 言い直している者 (F93、F10、F14、F17、M01) もいた。

表6 学習者の二回分データにおける「依頼終結部」の結果

		お礼		再依頼		関係作り
		(先生) ありがとう	(先生/どうも/まことに/本当に/お忙しいところ) ありがとうございました ありがとうございます	(先生) お願い (いた) します	お願い したいんです	
F01	一回目			○		
	二回目		○2先	○1		
F02	一回目		なし			
	二回目		○お			
F03	一回目	○				
	二回目	○1		○2		
F04	一回目					○1,2
	二回目		○1本 ○2			
F05	一回目		○			
	二回目		○			
F06	一回目			○		
	二回目			○		
F07	一回目			○1ま ○2		
	二回目			○		
F08	一回目			○		
	二回目			○		
F09	一回目	○2		○1ま		
	二回目		○1 ○2			
F10	一回目		○ど			
	二回目			○1ま ○2		
F11	一回目				○	
	二回目		○			
F12	一回目		○1 ○2			
	二回目		○先			
F13	一回目		○			
	二回目		○			
F14	一回目		○1本 ○2			
	二回目			○		
F15	一回目			○3ど	○2	○1
	二回目		○			
F16	一回目			○2	○1	
	二回目		○先			
F17	一回目			○		
	二回目		○先			
F18	一回目			○		
	二回目		○ど			
F19	一回目		○1 ○2			
	二回目		○先			
F20	一回目		○			
	二回目			●先		
M01	一回目			●		
	二回目		○1 ○2			
M02	一回目	○2		●3	○1	
	二回目		○			
M03	一回目		○1		○2	
	二回目		○2	○1		
M04	一回目		○2	○1		
	二回目		○			

再依頼と関係作りの使用者は、それぞれ 8 名 (F03、F12、F15、F16、F17、M01、M04、M91)、1 名 (F04) と少ない。これに関して、

池田・三好・村木（2002：56）は「オーストラリア在住学習者ではその（筆者注：「よろしくお願いします」という表現）使用が少ない」、そして「学習者の場合、「よろしくお願いします」ではなく、「お願いします」だけのものが多く見られた。」と報告している。恐らく中国語には似た表現がない上に、池田・三好・村木（2002）の報告と同様の非日本語環境である台湾でも、「よろしくお願いします」という表現をあまり耳にしないため、本稿の学習者の口からも出にくいのであろう。

最後に、この終結部の表現の最初における「先生、～」という現象について見てみたい。挨拶、お礼の箇所で「先生、～」と発話している学習者は半分以上の16名（F01、F03、F04、F07、F08、F09、F10、F11、F13、F16、F17、F18、F93、M01、M02、M04）いることが分かった。この現象は、中国語母語話者を調査対象者に含む謝（2000）、池田・三好・村木（2002）、徐（2007、2011）などでも観察されている。池田・三好・村木（2002）は、日本人よりオーストラリアにいる英語母語話者の学習者（EA）の「～先生」の使用率がかなり高く、それは「英語の談話でも＜挨拶＞の時などは名前を伴わせるのが普通であることが反映している」（57頁）とも報告している。

中国語では「老師（先生）」のような呼称は挨拶の機能もあり、挨拶やお礼をする際、「老師好（先生、こんにちは）」「謝謝老師（先生、ありがとうございます）」のように、「老師（先生）」という表現も一緒に用いることが少なくない。池田・三好・村木（2002）の結果と併せて考えると、本稿の学習者に見られた「先生、～」という発話は、英語母語話者と同様に、母語の中国語からの影響を受けている可能性が高いと言えよう。今後、この現象について学習者の中国語母語データとの比較も通して引き続き観察と分析をしていきたい。

7. おわりに

本研究では台湾人日本語学習者を対象に、彼らが日本語を勉強し

始めて約1年半経った時から、半年に一回依頼場面のロールプレイの縦断研究調査を実施している。本稿は二回分のデータ（47組、約174分）を用い、「会話開始部」と「会話終結部」の2つの話段における「入室」と「退室」における挨拶、「依頼開始部」、「依頼終結部」の3点を分析した。その結果は以下のようにまとめられる。

- ・「入室」と「退室」における挨拶では、うまく行っている学習者が多いが、自ら積極的に挨拶しない学習者もいることが確認できた。
- ・「依頼開始部」では、全員状況説明をしているが、正しい言い方で言えていない学習者が少なくない。一方、依頼予告も行った学習者の中では日本語母語話者が使わない表現を用いた者もいる。しかし、それは一回目のデータで使用され、二回目のデータではほぼ正しく発話されている。
- ・「依頼終結部」では、二回のデータともお礼で依頼を終わった者が多いが、過去形の「ありがとうございました」の使用者も少なくない。一方、「よろしくお願いします」の使用者はほとんどいない。
- ・学習者に見られた「退室」における挨拶表現、及び「依頼終結部」の表現から、事態の進行状況によって挨拶やお礼の表現において過去形と非過去形を使い分けるということが、まだできていない学習者が多いことが確認された。

本研究の調査は継続しており、今後上記のロールプレイの、異なる時期におけるデータを分析することが今後の課題である。それに加えて、本稿の焦点である「会話開始部」と「会話終結部」の2つの話段を始め、データ全体にわたる学生と教師のやり取りについても引き続き分析を行っていきたい。

<付記> 本研究は台湾行政院国家科学委員会の研究補助による

研究成果の一部であり（計画編號：NSC99-2410-H-126-038、NSC100-2410-H-126-022、NSC101-2410-H-126-021）、2012年4月28日に東呉大学で行った口頭発表に加筆・修正を施したものである。口頭発表の際には多くの先生方、また本誌査読の際には匿名の先生方から大変有益なコメントをいただいた。ここに諸先生方、関係者各位に心より御礼申し上げたい。

引用文献

- Beebe, L. M., T. Takahashi and R. Uliss-Weltz (1990) Pragmatic transfer in ESL refusals. In Scarcella, R. E. Anderson and S. Krashen (eds.) *Developing Communicative Competence in a Second Language* (55-73). Massachusetts: Newbury House.
- Olshtain E. & Cohen A. (1983) Apology: A speech acts set. In N. Wolfson & E. Judd (eds.) *Sociolinguistics and Language Acquisition* (19-35). Massachusetts: Newbury House.
- アクドーアン・ブナル、大浜るい子「日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の分析—相手配慮の視点から—」『世界の日本語教育』第18号、埼玉：国際交流基金日本語国際センター、2008、57-72頁
- 池田裕・三好理英子・村木万里子「中国語話者と英語話者の日本語における依頼—ロール・プレイによる発話データの分析—」『多摩留学生センター教育研究論集』第3号、東京：東京学芸大学留学生センター・東京農工大学留学生センター・電気通信大学留学生センター、2002、51-60頁
- 生駒知子・志村明彦「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号、東京：日本語教育学会、1993、41-49頁
- 猪崎保子「「依頼」会話にみられる「優先体系」の文化的相違と期待のずれ—日本人とフランス人日本語学習者の接触場面の研究—」『日本語教育』104号、東京：日本語教育学会、2000a、79-88頁

- 「接触場面における「依頼」のストラテジー—日本人とフランス人日本語学習者の場合」『世界の日本語教育』第 10 号、埼玉：国際交流基金日本語国際センター、2000b、129-145 頁
- 大嶋百合子・Brian MacWhinney 編『日本語のための CHILDES マニュアル』モントリオール：McGill University、1995
- 謝オン「談話レベルからみた「依頼発話」の切り出し方—日本人大学生同士と中国人大学生同士の依頼談話から—」『日本研究教育年報 5 (2000 年度版)』東京：東京外国語大学日本課程・留学生課共編、2001、77-101 頁
- 徐孟鈴「依頼会話の【終結部】の考察—日本人・台湾人・台湾人上級学習者の接触場面のロールプレイデータを比較して—」『言葉と文化』第 7 号、名古屋：名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻、2006、67-84 頁
- 「依頼会話【先行部】の考察—日本語母語場面、台湾人母語場面、日台接触場面のロールプレイデータを比較して—」『言葉と文化』第 8 号、名古屋：名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本言語文化専攻、2007、219-237 頁
- 「異文化語用論的な視点から見た依頼の談話—日台母語場面と接触場面の談話を比較して—」『台湾日語教育學報』第十六号、台北：台湾日語教育學會、2011、128-154 頁
- 張穎「依頼会話の展開パターンに関する日中対照研究」『言語文化と日本語教育』第 28 号、東京：お茶の水女子大学日本言語文化学会、2004、125-141 頁
- ポリー・ザトラウスキー『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』東京：くろしお出版、1993
- 水野かほる「「依頼」の言語行動における中間言語語用論—中国日本語学習者の場合」『名古屋大学言語文化論集』第 X VII 巻第 2 号、名古屋：名古屋大学言語文化部、1996、91-106 頁
- 宮田 Susanne 編集『今日から使える発話データベース CHILDES 入門』東京：ひつじ書房、2004